

# 刺激的な余暇

## ——近代の多様化するレジャーとファッション

京都服飾文化研究財団アシスタント・キュレーター 石関亮

### THRILLING LEISURE: DIVERSIFICATION OF LEISURE AND FASHION IN THE 19TH CENTURY

Makoto Ishizeki, Assistant Curator, the Kyoto Costume Institute

According to Alain Corbin, who completed the most fruitful study on the history of leisure, the meaning of “loisir,” a French word for “leisure,” has changed since the 19<sup>th</sup> century from “time that a person can use freely” to an unproductive act called “recreation.” Along with this change, recreational activities have been diversified and fashion and etiquette have been segmented as well. Looking at the progress in the fashion of typical leisure activities in the 19<sup>th</sup> century, namely, “walking,” “travel,” and “sports,” we can see that people sought comfortableness, overcame gender problems and aimed for physical relaxation. The modern society, where diversification has advanced at various social levels, has shifted into an era of popularization and democratization, and the development of leisure wear in society shows fashion trends for the next generation.

#### はじめに

レジャーに関する先行研究の中で最も豊潤な実りを私たちにもたらしてくれるのはアラン・コルバンである。ヨーロッパの海浜リゾートの成立を海に対する西洋人のイメージの変化と共に記述した『浜辺の誕生』（1988年）は、膨大な歴史資料を丹念に渉猟して求めた時代の証言の数々を見事につなぎ合わせて、当時の人々の心の内に潜む感性を浮き彫りにする。また、彼を含めた10人の社会史研究者によるレジャーに関する論考をまとめた『レジャーの誕生』（1995年）も、現在のレジャーの源流をどこに求めるか考える上で格好の視座を私たちに提供してくれる。

現在、私たちが「レジャー」と考える旅行やアマチュア・スポーツの起源をたどるのは難しい。しかし、それらがいつ頃からレジャーとして定着し、一般化したのかを探ってみることはできるだろう。レジャーやスポーツの歴史に関する文献をいくつか紐解くと、その多くが18世紀以降に大衆化の歴史を経験していることがわかる。

そして、レジャーはやはりファッションとも密接にかかわっている。KCIのコレクション

の中にもこの時代の散歩着、旅行用コート、スポーツ向けのコスチュームが数多く收藏されている。とりわけ19世紀のファッションは、時間や用途によって細分化されており、人々は自分の服装がそこから逸脱しないよう求められていた。新たな文化の登場は、新たな衣服のコードを生むきっかけとなったのであろうか。

本稿では、コルバンらの先蹤を抛り所に、近代、特に19世紀後半から20世紀初頭にかけてをレジャーの黎明期ととらえ、その登場と発展、それに呼応するように形成されていくファッションの関係を考察する。

### 「レジャーの誕生」あるいは余暇の娯楽化

「leisure (レジャー)」は「自由な時間がある状態。自由に使える時間。自由な時間、暇な時間」を意味する(『オックスフォード英語辞典』)。また、「leisure」の語源はラテン語のlicere(許された、任された)であるが、これと語源を同じくするフランス語に「loisir」があり、意味はやはり「余暇」である。コルバンは『レジャーの誕生』の中で、この「loisir」の定義の変遷に着目した。

1869年にリトレは、余暇[loisir]とは「仕事のあとの自由にできる時間」のことだと記している。この61年後のオージェの辞書によれば、余暇とは「通常の仕事に取られていない時間の中に、自発的に身をゆだねるような気晴らし、あるいは用事」の総体である。この2つの日付の間で、時間が自由になることから、あらゆる気晴らしへの意味の移行、あるいはこう言いたければ余暇からレジャーへの移行がおきたのである。

つまり、「loisir」が示す内容が、19世紀から20世紀の間に「自由にできる時間」という時間の質の問題から、その時間で行う「気晴らし」という行為の質へと横滑りしているのである。

コルバンはさらに次のように続ける。

この大異変はわれわれにとって決定的である。一方、自分の時間を自由にできることで教養人に許されるようになった多くの活動は、次第に仕事に吸収されていった。このようにしてオティウム・リテラトゥム(otium litteratum)、より厳密には文学的創造が、知的労働になり、同時に、余暇の領域を離れたのである。(註1)

「loisir」の意味内容の変化はコルバンにとって「大異変」だった。単に時間から行為へ

とその軸足を移しただけではなく、「気晴らし」という限られた行為へと収斂していたからである。

かつての余暇にはさまざまな活動が含まれていた。古代からの西洋の歴史を振り返れば、神学、文学、自然科学などの諸科学の発展が、職業的専門家ではない教養人のアマチュア的探究心や純粋な感性に多くを負っていたことを考えてみればわかる。今日的な考え方からすれば余暇と仕事の区別は非常に曖昧だったとっていい。しかし、近代に入るとその境界線が徐々に確定してくる。余暇活動のリストからは社会的貢献度の高い活動、近代社会の用語でいえば「生産的な活動」が外され、結局、手元には「気晴らし」などの個人的で浪費的ともいえる非-生産的な活動が残ることになる。

### 多様化する余暇、細分化するファッション

「レジャー」が、「娯楽」や「気晴らし」などの非生産的活動へとその意味を減じていくのと反比例して、娯楽や気晴らしの対象はその数を大幅に増やしてきた。あまりにも多岐にわたるためここですべてを網羅することは難しい。また、それぞれが次の世代にもたらしたであろう影響力を考えると、すべてを同列に扱うこともできない。

本稿ではファッションをひとつの補助線として話を展開したい。19世紀、<sup>エチケット</sup>礼儀作法がそれまでにないほど微に入り細をうがって人々の行動を規定すると同時に、どの場所でどの装いをすべきか、という衣服のマナーが確立される。もちろん、すべてがユニフォームのように均質化しているわけでもなく、基本的なシルエットはそのときの流行に基づくため、正確にカテゴリーを定めることは難しいが、ある程度の傾向を抽出することは可能である。今回は、19世紀のレジャーを代表し、ファッション・プレートにも取り上げられることの多い「<sup>ウォーキング</sup>散歩」、「旅行」、「スポーツ」を取り上げる。

#### 1. 散歩

「慰みに歩くことは19世紀のものである」、とカニングトン<sup>ウォーキング</sup>は言う(註2)。その手の歩行は、街の通りや公園をそぞろ歩きするだけのものから、自然を求めて山野に足を伸ばしたハイキングやピクニック、より高い山の頂へと目指して進む登山まで含めることができる。そして、それらすべてのレクリエーションが確かに19世紀において人々の心をとらえ、その生活に入り込むようになった。

歩行が健康によいということはディドロの『百科全書』にも書かれていることだが、歩くことが娯楽になるにはそれなりのお膳立てが必要である。都市に住む人々の日常生活においては公園がその役を引き受ける。ロンドンのハイド・パーク、パリのリュクサンブール公園

やチュイルリー公園などは既に賑わいを見せていた。19世紀になると、パリ郊外にブローニュの森（1852）、ヴァンセンヌの森（1855-66）が、ニューヨークにはセントラル・パーク（1876）が新しく散歩者のリストに加わる。

産業革命が進行した大都市では下水道の整備、治安改善などの都市改造が行われ、とりわけパリは、街自体も散歩向きの顔に化粧直しされた。19世紀前半のパリを象徴する「パサーマガザンジュ」は、軒を連ねた商店のウィンドー越しに人を誘惑するさまざまな商品と天候の悪さを気にすることなく通行できるガラス天井によって、街路を単に人々が移動しすれ違うだけの通路から何らかの出会いや発見を予感して滞留してしまう娯楽空間に変えてしまった。世紀中頃には「ボン・マルシェ」（1852）、「ルーブル」（1855）、「ル・プランタン」（1865）などの百貨店グラン・マガザンが相次いで登場し、その目新しさ、出入りの気軽さで人々を呼び込み、消費者となるための手ほどきを行った。

イベントや娯楽施設の増加も見逃せない。1851年のロンドンを皮切りに始まった万国博覧会は19世紀後半を彩る国家規模の娯楽イベントである。他にも競馬場や動物園、植物園、水族館、美術館などが各地で作られ、社交場として機能する。ディオラマやパノラマ、はたまたより雑多な見世物小屋の類も、街に現れたときには私たちの目を楽しませてくれる。こうして、街歩きの地図が次々と塗り替えられていく。

もちろん、散策は街の中だけにとどまらない。鉄道、自転車、自動車とさまざまな移動手段が登場するたびに、見飽きた風景の街を抜け出し郊外の自然に囲まれた場所へ安らぎを求めようとする人々の欲求は刺激させられる。

散歩着と訳せるであろう「ウォーキング・ドレス」がいつ頃からジャンルとして現れたのかは定かではない。『オックスフォード英語辞典』によれば、1792年頃のジェーン・オースティンの小説にこの表現が登場している。また、『Encyclopedia of Clothing and Fashion』によれば、1850年頃、ジャケットとくるぶし丈のスカートからなる「ウォーキング・スーツ」が流行している。さらに私たちは、オスカー・フィッセルとマックス・フォン・ベーンの「Mode and Manners」の中に「ウォーキング・スカート」の記述をみつけることができる。その導入はナポレオン3世の妻ユージェニー皇后によるところが大きく、1859年とも60年ともされている。「少しだけ足が見える程度に短い」このスカートの丈が徐々に短くなるにつれて、その下から顔をのぞかせるペチコートは華美になっていく（註3）。例えば、純白のドレスに身を包んだメッテルニヒ侯爵夫人が私たちに見せる赤いペチコートだ。この頃のドレスの流行は、巨大化したクリノリンによって後ろへたつぷりと広がるスカートと引き裾トレーンが特徴であるが、当時の女性誌の記述によれば、「女性の高価な絹のスカートを引きずって通りを歩く」ことは「もったいないことで、優雅でもなく極めて汚い」ことであり（註

4)、ウォーキング・ドレスにおいては、スカートが「地面に触れないよう作る」のが望ましいとされた(註5)。このことは、当時のウォーキング・ドレスが、美的で衛生的な視点からではあるものの、歩行における利便性や快適性を少なからず考慮に入れた衣服であることを伝える。

より時代が下ると素材や装飾が多様化するため一般化することが難しいが、快適性という視点で考えると、テイラード・スーツには触れておくべきだろう。

この1890年代から流行する紳士服の影響をこれまで以上に色濃く受けた女性用スーツは、紳士服の中心地イギリスからもたらされた。ジャケットとスカートからなり、色合い、素材、デザイン、カッティングなどすべてにおいて男性用スーツの要素を受け継いでいる。フレア・スカートであることが多く、同時代の他種の女性服と比較すると非常に運動性の高いものになっている。このアイテムの導入に深くかかわったのは、イギリスのメゾン「レッドファン」である。デザイナー、ジョン・レッドファン [1853-1929] は早くからスポーツの要素を取り入れた作品を制作しており、顧客には女優のリリー・ラングトリイやヴィクトリア女王がいた。

## 2. 旅行

「鉄道」! なんと魔法の言葉! なんと神々しき光に包まれているのか! 我々にとってそれは、文明の、進化の、友愛の同義語だ。

『ラールス19世紀大辞典』の「鉄道」の項の冒頭を飾る、この19世紀の大発明に対する賞賛は、当時の人々が鉄道に対して抱いていた高揚感をしっかりと代弁している。フランスでは、1829、リヨン＝サン＝テティエンヌ間に国内初の鉄道が開通。隣国イギリスでは、フランスに先んじて4年、鉄道開設において世界初の栄光を既に勝ち取っていた。

鉄道の登場は人々の間に旅行熱を流行らせた。1820～40年代にかけて「ベデガー」、  
「マーレー」、「ジョアンヌ」といったガイドブック・シリーズが次々と出版され、見知らぬ土地への憧れを刺激する。鉄道網が発展すればするほど移動時間は短くなり、目的地での滞在時間は長くなる。温泉地(バース、ロイヤル・タンブリッジ・ウェル、スパ、ヴィシー、エクス＝レ＝バン、バーデン＝バーデン)、海辺(ブライトン、ブローニュ、ディエップ、ビアリッツ、ニース、スヘーヴェニンゲン、ドーベラン)、山間の街(シャモニー、ダヴォス、サン＝モリッツ)が保養地として次々と整備され、発展する。人々は温泉であればもちろん湯治を、海辺であれば海水浴やヨット遊びを、山間部であれば山登りやスケート、カー

リング、スキーなどのウィンター・スポーツをそれぞれ楽しむ。特別な遊びができない日でも、昼は遊歩道を散策し、夜は食事やコンサートに向かう。場所によってはカジノもある。まさにすべての時間がレジャーにつながっている。

蒸気船の発達は、かつて命がけの冒険だった大西洋横断を快適な旅に変えた。1837年に英国船グレート・ウェスタン号（鉄道会社の名前にちなんでいる）が蒸気船で初めて北大西洋航路に就航。以降、運行会社は運行の速さとスケジュールの正確さと船内の快適さを競い合った。19世紀後半からは、コルバンが分析するように豪華客船の時代が到来する。船は「ブルジョアの富裕な家」のイメージから「豪華ホテル」へ、そして非日常的な「移動する祭」へと進化していった（註6）。もはや移動そのものが<sup>レジャー</sup>娯楽だ。

旅行服については、フランソワ・ブーシェの『西洋服装史』に次のような記述がある。

1871年になると、新語"ツーリズム（遊覧旅行）"用の特別な服装の考案が試みられた。それはタータンのスカート、胴着とシュミゼット、カスケット帽とスコットランド風靴下である。1888年には、ひだのあるチュニックとスカートからなる旅行用の"トロットウール（外出着）"が新しい服装として報じられた。これらは不便な服装を単純化しようという称讃すべき試みではあったが、あまりに遊離しすぎていた！（註7）

これらがどういったものかは想像する以外にないが「traveling dress」や「toilette de voyage」という記述であればこの頃の女性誌には既に散見され、旅行服というジャンルは定着していたと思われる。例えば、1871年8月の『Journal des demoiselles』誌に登場する旅行服は次のような解説がついている。

アルパカ製のスーツ。裾にプリーツ装飾を施したペチコート。ベルベットのテープと絹製フリンジの装飾。両脇に明きのあるチュニック。背中心まで明きのあるマントレ。ベルト付き。二重衿風の装飾。

鉄道や蒸気船の設備がその登場時に比べたら格段に向上していたとはいえ、19世紀後期においても、快適とまではいかなかったようである。『Encyclopedia of Clothing and Fashion』によれば、蒸気船では「潮水と煙突からの煤煙との複合効果で衣類は使い物にならなくなり、船の甲板デッキも年間ほとんどが冷え冷えとしていた。そのため、暖かく体を包み込んでくれるオーバーコート、特にアルスターがお勧めとされた。」

アルスター（コート）は、本来、1860年代末に広まった男性用のオーバーコート。厚手の

ウール地の防寒着で腰ベルトか背バンドがつく。これが70年代には早くも女性たちの街着や旅行着としても広まった。男性服由来の他のアイテム同様、アルスターも当時としては非常にジェンダーレスな服として『パンチ』誌などで風刺の対象となった。他にも、旅行用コートとしては、同じく男性服から来たインヴァネスなどが着用された。

### 3. スポーツ

古フランス語の*desporter*（楽しませる、よろこぼせる）を語源に持つ英語「sport」は、19世紀に入って、フランス語に逆輸入される。『19世紀ラールス大辞典』でスポーツの例として挙げられていたのは、競馬、漕艇、ハンティング、シューティング、フィッシング、アーチェリー、体操、フェンシング、射撃、ボクシング、レスリング、庭球、クリケット、乗馬、スケート、水泳、などである。他にも、ポロ、ゴルフ、サッカー、野球、バドミントン、ホッケー、クロケット、スキー、バスケット・ボールなどさまざまなスポーツが19世紀に生み出されたり、ルールが標準化されたりして現在につながっている。

スポーツはプロ化が進む20世紀になるまでは完全にレジャーの範疇だった。競馬、狩猟、フィッシング、フェンシング、クリケットなどは貴族社会から続く伝統的レジャーだが、女性よりもむしろ男性の娯楽だった。女性は衣服と衣服を規定するモラルの制限から大きな運動がしにくく、スケートやホッケー、クロケットなどが好まれた。しかし、なかにはその制限から抜け出すものもあった。水着やサイクリング・コスチュームがそれである。

海の保養地で着られるレジャー服は大きく2つある。1つは浜辺や遊歩道での散歩着、もう1つは水着である。前者は先述のウォーキング・ドレスとあまり違いはない。後者の水着だが、19世紀前半はほとんど下着に近いものであった。19世紀中頃から、それまで男女別々だった水浴の場所や時間が次第に男女混合になり、水着のスタイルも異性の視線に耐えられるように膝丈のドレスにパンツやニッカボッカーが合わされて、濡れても比較的動きの取れやすい形になる。機能的要請だからとはいえ、女性が二本足であることを周囲に見せた瞬間である。そのニッカボッカーがショーツに代わるのは、1910年代まで待たなければならない。それまでは、やはりドレスの1種類としてその時々流行によってシルエットは変わる。

最後にサイクリングだが最初にペダルとブレーキを取り付けた自転車が1839年に登場する。近代自転車の原型といわれる「ベロシペード」、前輪の異様に大きいオーディナリー型を経験し、1885年、前後の車輪の大きさが同じで後輪駆動の「ローバー安全型自転車」にいたる。さらに88年、ダンロップが自転車の空気タイヤの特許を申請。ホイールの形も整備され、現在の自転車にいたる。

自転車の登場とその流行は女性服に大きなインパクトを与えたのは周知の事実である。服

飾史家ジェイムズ・レーヴァーは「その影響の大きさにおいて、火の発見や印刷術の発明に比する」とまで断言する（註8）。1851年に女性解放論者アメリア・ジェンクス・ブルーマーが提唱し、定着させようとしたパンツ・スタイルの女性服「ブルーマー」が復活する（30頁の作品（14）参照）。構造上、自転車をこぐのにスカートは適していない。丈も長くボリュームもある当時のドレスでは、タブーである脚を見せることになってしまう。そこで、かつて周囲の非難と嘲笑で忘れ去られていた服が再びファッションの舞台に召還された。

### 飛翔する余暇

ステイーヴン・カーンは『時間の文化史』において、モーリス・ルブランの自転車旅行を題材にした小説『Voici des ailes!（これが翼だ！）』（1898年）を取り上げる。自転車に乗って感じるスピード感や新たな時間感覚が、同行する2組の若夫婦の将来を変える。

路上で2組の夫婦が始めて感じる動きのリズムは、周囲の世界に染みこんでいく独特な感覚であって、このとき彼らの感覚は新たな領域に向けて開け放たれているのだ。（中略）姓でなく名で呼びあうことで社会の制約がゆるむ。パスカルの妻が服のボタンをはずして、噴水で首と肩を洗うとき、衣服からの解放、性的解放が始まる。翌日、女ふたりはコルセットをはずしてしまう。その後ブラウスもぬいでしまい、上半身はだかで自転車に乗る。そして、結婚のきずなはくずれ、彼らは相手を取り替え、自転車旅行を終えてみれば夫婦の組み合わせが変わっている。（註9）

官能小説のような筋書だが、自転車旅行という1つのレジャーからほころび出る非日常の形、社会的制約からの脱却の可能性がレジャーにはある。19世紀後半、レジャーが娯楽と同義になり、気晴らしの方法がいろいろと考案された。気晴らしにも刺激が必要なのだ。その刺激の多くは都市や鉄道、スポーツといった近代が私たちにもたらした新しさでもある。とりわけ、身体に直接刺激を与えてくるスポーツは、それまで〈家〉に居ることを強いられた女性たちにとって、これ以上ない新しさだったに違いない。

### まとめ

19世紀後半におこったレジャーの多様化は、欧米諸国に浸透した工業化と経済発展、それに伴って花開いた近代的な都市文化が人々の欲望を顕在化した結果である。そして、さまざまなレジャーを女性たちは積極的に享受するようになり、その活動と共に衣服はさらに分化する。当時の礼儀作法は、既に述べたように衣服の種類とそれを着る時間、場所を明確に



規定しようとする。時間と場所の分化だ。

朝の部屋着、散歩のための乗馬服、昼食の際の優雅な化粧着<sup>ネグリジェ</sup>、徒歩で出かけるならば街着、馬車で行くなら訪問着、それに晚餐のための衣装、夜会や舞踏会のための衣装、こう並べたてても少しも誇張しているわけではない。夏の海岸となれば幾種類かの海水浴の衣装が加わってさらに複雑になり、秋や冬に男性と一緒に健康的な運動を楽しみたい場合はその上に狩猟服やスケート用衣装が必要である。

H・デペーニュ 『Le code de la mode』 (註10)

礼儀作法だけではない。19世紀の服飾業界を考えると既製服産業が登場し、百貨店や通信販売などの商品流通形態が多様化している。また、徐々にではあるが中・下層階級の所得も向上し、消費文化の裾野が拡大していた。さまざまなレベルで社会の多様化が進み、次の民主化、大衆化の時代へと移っていく。この時代にファッションが経験したかつてないほどの細分化は、来るべき明日のファッションを準備するひとつの時代の結実なのかもしれない。

<註>

1. アラン・コルバン 『レジャーの誕生』 渡辺響子訳 藤原書店 2000年 73頁
2. Phillis Cunnington, Alan Masfield, *English Costume for Sports and Outdoor Recreation: From the 16th to the 19th Centuries*, London: Adam & Charles Black, 1969 (reprint 1978): 331.
3. Osker Fischel, Max von Boehn, *Mode and Manners of the Nineteenth Century: As Represented in the Pictures and Engravings of the Time*, vol.3, English translation, London: J. M. Dent and Sons, New York: E. P. Dutton, 1927: 79-80.
4. *Peterson's Magazine*, July 1862.
5. *Peterson's Magazine*, August 1862.
6. アラン・コルバン 『レジャーの誕生』 74-96頁
7. フランソワ・ブーシェ 『西洋服装史』 石山彰監訳 文化出版局 1973年 394頁
8. James Laver, *Taste and Fashion*, 1937 (reprint 1946): 71-72.
9. スティーヴン・カーン 『時間の文化史：時間と空間の文化：1880-1918年 上巻』 浅野敏夫訳 法政大学出版局 1993年 163頁
10. フィリップ・ペロー 『衣服のアルケオロジー：服装からみた19世紀フランス社会の差異構造』 大矢タカヤス訳 文化出版局 1985年 132-133頁